

令和 2 年 6 月 2 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02451

研究課題名（和文）新聞小説と挿絵の相関性解明を基盤とする大正昭和期の文化融合に関する総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive study on fusion of culture in Taisho and Showa periods by elucidating the correlation between newspaper novels and illustrations

研究代表者

新井 由美（ARAI, YUMI）

大阪大学・文学研究科・招へい研究員

研究者番号：40756722

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：挿絵画家小村雪岱の新聞小説挿絵と小説本文の関係を調査し、挿絵制作の方法論を明らかにした。古画を典拠とする挿絵制作では大正末の美術界における絵巻再評価との関連を見出した。俯瞰的構図の挿絵では舞台装置家の視点が活かされており、挿絵は登場人物の心理に連動していること、また挿絵は映画のカメラスティック視点も意識されていることが分かった。更に雪岱が同時代の明治文学再評価の動きという文壇の動向にも関心を抱いていたことが分かり、彼の文学への造詣の深さを確認した。これらのことから、雪岱挿絵は同時代における文学・美術・演劇・映画という異分野の結節点としての重要な意義を持つアクチュアルな媒体であることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

挿絵という媒体に注目し、小説本文との関係性を精査することによって、従来の文学研究において重要な研究対象とは見なされていなかった大衆文学の再評価につながる視点を構築した。更に、挿絵を当時の文化的状況の中に位置付け調査することによって、挿絵は小説作品の視覚化という本来の目的だけではなく、それが同時代における文学・美術・演劇・映画という異分野を相互に結びつける結節点として機能しており、同時代の大衆文化の一側面を形成する重要な媒体であることを明らかにした。現代の新聞小説においても挿絵は必ず毎回付されるものであり、新聞小説の歴史的かつ共時的意義の解明においても、挿絵研究は必要不可欠な視点である。

研究成果の概要（英文）：The methodology of producing illustration was clarified by investigating the relationship between newspaper novel illustrations and novel texts by Settai Komura. The relation between the illustration producing method based on traditional paintings and the re-evaluation of picture scrolls in painting circles the late Taisho era was clarified. It was cleared that the perspective of the stage designer was utilized in the illustrations of the bird's-eye view, and that the illustrations were linked to the peoples' psychology in novels. And, the illustrations were also drawn by taking the view point of the camera-frame in movies. In addition to it was found that Settai was interested in the trend of the literary circles such as the movement of re-evaluation of Meiji literature with the depth of knowledge in literature. It was confirmed that illustrations by Settai were art works with an important meaning connecting to the literature, paintings, stage arts, and movies in the same period.

研究分野：近代文学

キーワード：挿絵 新聞小説 大衆文学 邦枝完二 白井喬二 舞台装置 映画

1. 研究開始当初の背景

従来の文学研究においては挿絵が主要な研究対象として扱われることは殆どなく、美術研究においても、挿絵は画家の仕事の中では本画より格下の副業的な扱いしか受けてこなかった。だが今日も新聞紙上には連載小説が掲載され、そこには必ず挿絵が付されている。時代の空気を切り取り読者に親しまれてきた新聞小説という媒体に対する関心は、現代においても衰えていないのである。申請者は新聞小説という形態に研究上の関心を有し、特に挿絵画家が果たす役割、中でも文芸への深い愛情と造詣を持ち続けた小村雪岱に注目し研究を行ってきた。近年雪岱研究は盛んになりつつあるが、大きく取り上げられる機会はまだ美術分野に偏っており、特定の小説作品との具体的な関係性についての調査考察は未だ手薄である。雪岱挿絵の芸術性を解明するためには、小説本文に対しなぜその作画方法が選ばれたのかという必然性に切り込む視点が必要である。2014年に夏目漱石「こころ」の連載100年に際し、『朝日新聞』では、漱石作品の初出形態による再連載、その際に付された挿絵紹介など種々の特集が組まれた。挿絵を含む新聞小説研究の気運は、こうした動きも背景としつつ夙に高まりつつあると言える。

2. 研究の目的

申請者は、科研(研究活動スタート支援「文学と美術の交流—小村雪岱の小説挿絵に関する研究—」課題番号15H06350)において、新聞小説における雪岱挿絵と小説本文の相乗効果を検証し、その過程で雪岱挿絵を(a)既存絵画からの取材(b)人物の動きの連続的描写(c)俯瞰的な視点位置からの描写という三つの類型パターンに分類した。それぞれの背景には、(a)既存絵画に関する知識(b)演劇的動線への興味(c)舞台装置と人物の位置の関係という視点が方法論として存在しており、雪岱はそれらを綿密に使い分け物語の魅力を引き出していると考えた。一般的な挿絵は、文芸と美術という二つの分野の融合だと考えられるものであったが、雪岱挿絵は更に演劇というもう一つの芸術分野が加わって成立している。本研究は、雪岱挿絵を文学・美術・演劇という分野を超えた結びつきを可能にする結節点として論じ、総合芸術というものの捉え方の新しい側面を提示することを目的とするものである。雪岱挿絵をモデルケースとして、文学・美術・演劇の異分野融合として生み出されたものがいかなる文化現象を形成し人々に享受されていたのかを解明し体系化してゆくことも、本研究の目指すところである。

3. 研究の方法

(1) 雪岱挿絵リストの補完および雪岱の舞台装置リストの作成：作成中の雪岱挿絵リストの補完を行う。従来調査に用いた参考文献に加え、『小村雪岱「雪岱調」のできるまで』展図録(2018年1月20日～3月11日、於川越市立美術館)、真田幸治編『小村雪岱挿絵集』(2018年10月17日、幻戯書房)、その他当時の新聞や雑誌を参照する。また、雪岱が手掛けた舞台装置のリストの作成を行う。小村雪岱に関する展覧会図録、同時代の演劇雑誌記事の他、劇場切符の販売所が発行していた『月報プレイガイド』などの劇場案内を参照する。これらのリストによって、雪岱の挿絵・舞台装置に関する仕事の概要を把握する。

(2) 雪岱挿絵の類型パターンの確立：(1)で作成した雪岱挿絵リストを元に、雪岱挿絵が掲載された新聞紙面の該当箇所を複写・スキャンしデータ保存を行う。その際、連載期間の紙面全体に目を配り、関連記事もリストアップしておく。データ化した挿絵を一点ずつ検証し、「2.研究の目的」に示した類型パターンに分類されることを確認すると共に、それ以外のパターンの抽出も行う。雑誌掲載小説の挿絵についても同様にデータ化を行う。

(3) 雪岱挿絵と小説本文の相関性の解明：(2)で行った挿絵のパターン分類に基づき、小説一作品ごとに挿絵と小説本文の相乗効果を検証する。挿絵の素材としての既存絵画の存在・演劇的要素の導入・舞台装置の影響という視点を意識しつつ小説と挿絵を併せ読むため、同時代の美術・演劇に関する諸文献も調査し参照する。

(4) 雪岱挿絵の方法論の相対化：雪岱以外の挿絵画家の場合はどのような表象が試みられているのかを調査し、雪岱をモデルケースとして確立した文学・美術・演劇の融合のあり方を相対化する。また雑誌掲載小説の雪岱挿絵の方法論を調査し、新聞小説挿絵との違いについて検討する。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

①古画に取材した挿絵制作の同時代背景(美術分野との関連)

雪岱の新聞小説挿絵第二作目に当たる村松梢風「綾衣絵巻」(昭和3年9月9日～11月23日『東京日日新聞』)は、佐幕派の疑いをかけられ暗殺される大和絵中興の祖、絵師冷泉為恭とその妻綾衣の生涯を描いた小説である。本作は黒と白のコントラストを意識した画面構成や俯瞰的構図などの雪岱挿絵の特長が確立される過程の作品であり、古画に取材した挿絵も作中に確認される。最終回に描かれた挿絵【図1】は、為恭の自画像に「夢さめたる」という詞書が添えられているが、調査の結果これは為恭筆「石雲清事絵巻」末尾の絵を雪岱が模写したものであることが分かった。「石雲清事絵巻」の存在は、大正13年京都知恩院で営まれた為恭の法要の折に作成された冊子『田米知佳』冒頭に【図1】に当たる部分が掲載されたことで公になるが、以後昭和4年刊行の『田米知佳画集』まで公刊は見い出せず、この絵巻の存在を知る者はごく一部の人間に限られる。雪岱は大正12年末から翌年にかけて、日本画家松岡映丘の指揮のもと東京美術学校の委



【図1】

嘱で京都帝室博物館で絵巻物の模写に従事した期間に、何らかの形でこの絵巻に接したものと推測される。

この時期、絵巻という様式への関心が高まりつつあったことは重要である。為恭に私淑していた松岡映丘による「新興大和絵会」の結成（大正10年）、木村莊八「たけくらべ絵巻」（大正15年）、新興大和絵会会員による「草枕絵巻」（同）「明治文学絵巻」（昭和2年）の制作などはその具体的な表れであり、絵巻の流行に期待する同時代言説も確認できた。雪岱が新聞小説に絵巻を典拠とする挿絵を何枚か描いているのは、こうした同時代の動向と無関係ではない。泉鏡花「山海評判記」の挿絵における「鳥獣人物戯画」模写、「三十六歌仙絵巻」模写などもその例である。

雪岱が「綾衣絵巻」最終回の挿絵を【図1】の形にしたのは、それが為恭の悲劇的生涯を締めくくりにふさわしく、人の一生が「夢」のようなものであることを示唆する意匠だと考えたためである。古画の摂取は無作為に行われるわけではなく、小説の内容に合致するものを選びすぎ、為恭の実人生がそこに重ねられるような工夫がなされているのである。

雪岱が挿絵制作において絵巻の存在を意識したのは、大正末から昭和初期にかけて、絵と詞書からなる絵巻という古典的な形態が近代文学の持つ物語性と融合において再び脚光を浴びた時代背景が深く関わっていることが明らかになった。詞書（小説本文）と絵（挿絵）の融合という点では現代の新聞小説を絵巻の一形態と捉えることも可能であり、研究の過程では絵巻と挿絵・挿絵と映画・映画と絵巻といった媒体同士の関連を論じる同時代言説も確認できており、挿絵の持つ役割が小説本文の視覚化という狭義のものに留まらないことが明らかとなった。

②演劇・映画的視点の導入（演劇分野との関連）

②-1 雪岱の舞台装置リスト作成：雪岱が舞台装置家として関わった演劇は二百以上と言われるが、当時は動画や写真などの保存方法が不完全なため、正確な数や具体的な内容は特定できないものも多い。先述3.（1）に掲げた文献を中心に調査を行い、現在100余りの演目については、上演時期・劇場・場面数・制作年などの基礎データを採取した。リスト作成は今後も継続することとし、原作が比較的近年に発表された小説や戯曲であること、原作者との間に親交があったと思われることなどを基準に、特定の作品に関する調査も併行して行ってゆく。

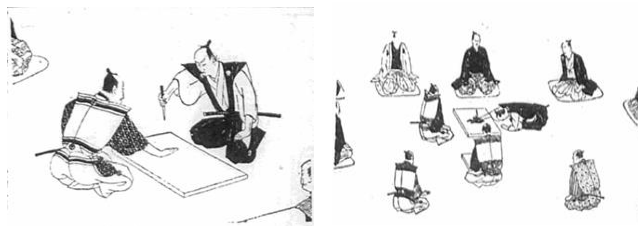
②-2 舞台装置との関連：本研究においては、現在判明している雪岱の舞台装置の仕事の中でビジュアル資料がある程度残っている「一本刀土俵入」（長谷川伸作・初演昭和6年7月東京劇場）をモデルケースとし、舞台装置の仕事における雪岱の所見などを調査した。

雪岱は本作の舞台である利根川・取手に赴き、当地の建物などを見聞し現地取材を行っており、舞台装置の制作に当たって「写実」ということを重視していたことが判明した。この姿勢は極めて正確なパースで建物を描くという雪岱挿絵の特長に通じ、更に雪岱が「此の写実の中に品位と詩のあることが必要」（「一本刀土俵入の舞台」、『アトリエ』昭和11年9月）と述べていることは舞台装置における文学性の加味という点で重要な発言である。本研究では雪岱の舞台装置の魅力の理論化には至っていないが、雪岱挿絵の建造物（黒板塀、仁寺垣、河岸の並蔵など）に「情趣のなつかしさ」を感じるという鍋木清方の言（『小村雪岱画集』「序」、昭和17年12月）を、現段階での評価の指針として有効なものとする。

本研究では、地方新聞掲載の雪岱挿絵についても調査を行い、白井喬二「藤三行状記」（昭和8年5月4日～12月31日『福岡日日新聞』、ほか地方新聞三紙に掲載）においても、小説の内容に即した作画法の存在を確認した。【図2】は御前評定に臨席を許されず主人公藤三が縁側に控える場面であり、武士社会の厳然たる身分秩序や主人公の疎外感という心理を俯瞰的構図によって表現している。【図3】（長谷川伸「伊太八編」昭和6年10月9日挿絵）では町家の表と裏口の人物が同時に視界に入るように描かれており、これは書割を眺める演劇の観客の視線で捉えた構図である。このように雪岱挿絵には舞台装置家の視点が随所に看取される。

また雪岱が装幀を手掛けた長谷川伸『母親人形』（昭和9年3月、新小説社）には、表／裏表紙および表／裏見返しの意匠が道具帳（舞台装置を1/50の尺度で描いたもの、舞台に合わせて縦に比べ横の長さが極端に長い寸法となる）の趣向が用いられており、演劇的要素が造本においても意識されていることが明らかになった。

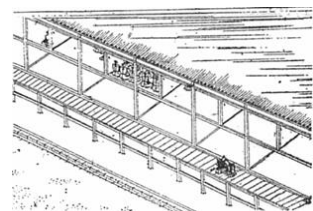
②-3 映画的視点の導入：雪岱挿絵では視点を一箇所定め、連続した人物の動きを動画風に表現することがしばしば行われるが、本研究では映画のカメラ的な動きが挿絵に用いられていることも明らかになった。手を板上に延べ小柄で交互に突く「藤三行状記」の勝負の場面で、二人の侍の緊迫状態のアップ【図4】から



【図4】

勝敗が決した場のズームアウト【図5】へと視野の広がりを二枚の挿絵で表現している。これは映画的手法を挿絵という媒体で表現したものであり、動画との連動意識が雪岱挿絵の特長であることも明らかになった。

【図5】



【図2】



【図3】

③雑誌挿絵の方法論との相違（文学分野との関連）

新聞小説挿絵の作画法との相違を明らかにするため、邦枝完二「樋口一葉」における雪岱挿絵の調査を行った。枚数制限のある雑誌挿絵では②-3に見たような演劇的・映画動的動線を意識した作画とは異なり、一枚の挿絵により多くの情報を盛り込み作品世界の深みを示すための工夫が施されている。【図6】は一見邦枝のテキストの忠実な再現に見えるが、ここには樋口一葉の「たけくらべ」という先行テキストが重ねられており、本作が「たけくらべ」を下敷きに執筆されたこと、それが作品世界の重層性という効果を生んでいることが挿絵によって示唆される。本作の雪岱挿絵は、樋口一葉の小説や日記を知悉していなければ描き得ないものが多い。雪岱が一葉文学に深い造詣を有するのは、雪岱が関東大震災以後に本格化した明治文学再評価の動向に積極的な関心を寄せていたためだと考えられる。この点は、4.(1)①に示した絵巻という様式への関心とも重なっており、雪岱は同時代小説の挿絵以外に、明治文学を画材とした「草枕絵巻」「高野聖絵巻」（「明治文学絵巻」への出品作）の制作も行っている。「高野聖」は現在散逸しているが、彼が明治文学の絵画化という文学と美術の接点としての仕事に強い関心を寄せていたことは事実である。



【図6】

④挿絵画家を取りまく同時代状況の解明

①～③に関する調査の過程では、挿絵に関する同時代文献の発掘・収集にも努めた。雑誌『東陽』第1巻第5号（昭和11年9月）掲載の「挿絵座談会」は従来の挿絵文献に言及されていない資料であり、問題点を整理した上で論文化し大阪大学リポジトリに掲載した。②-3に示したように、映画という新興メディアは挿絵の制作にも影響を与えているが、席上岩田専太郎の発言によれば、雪岱の挿絵が逆に映画のセットを組む際にそのまま利用された事実があるという。挿絵という媒体が文学・美術・映画演劇の結節点であることの証左として重要な発言であり、具体的な状況を更に精査する必要がある。

(2) 得られた成果の国内外における位置付けとインパクト

以上の如く、挿絵は文学ジャンルにおける小説本文の視覚化という狭義の役割のみならず、同時代の美術・演劇・映画といった媒体とも密接に関わるアクチュアルな問題を内包した媒体である。挿絵研究はこれらの媒体に関わる研究分野間の領域横断的な知見や研究成果をもたらし、大衆文化やメディアミックスの研究材料としても有効に働く。また今日においても新聞小説には必ず挿絵が必要とされている事実を鑑み、挿絵研究には現代の新聞小説受容の実態を照射する側面が確実に存在する。その成果は一部の研究者のみで共有するのではなく、一般の新聞読者にとっても関心が向くものとして提示することができる。

(3) 今後の展望

新聞小説においては挿絵の出来が小説の評判を左右すると言われ、昭和期に入ると挿絵専門の画家以外に純粋絵画（本画）分野の画家も新聞小説に参入し広大な挿絵市場を形成することになる。だが数多の画家の中から挿絵の担当者を決定するに至る経緯や必然性については従来詳しく言及はされず、挿絵画家の起用の実態はいまだ不明瞭な部分が多い。

現在の新聞小説研究は、基本的に一つの作品単位で小説（作家）と挿絵（画家）の関係性を捉える傾向にある。新聞小説を総体的に把握するための主要文献として高木健夫編『新聞小説年表』（平成8年新装版刊行）があるが、記載されている小説タイトル・作家・挿絵画家・掲載紙・掲載期間のみでは、上記のような作家と画家の組み合わせの必然性を窺い知ることは不可能であり、その作品が同時期の他の新聞小説の中に占める総体的位置付けは顕在化してこない。

新聞小説は作家と画家の他に新聞社の意向や読者の要請があって初めて成立するものであり、それは新聞小説が最も活況を呈した昭和戦前期において間違いなく同時代の大衆文化の一面を形成するものである。新聞小説を作家個人の営為の枠に収めるだけではなく、大衆文化としての新聞小説を総体的に捉えるための体系化に向けた視点が今後は必要である。個々の作品ごとの絵と文の相乗効果の解明は今後も外せないが、同時に挿絵という媒体の領域横断性、同時代性を鑑み、特に挿絵画家に関する情報を網羅した新しいデータベースの作成が今後の課題である。

(4) 予期しない事象によって得られた新たな知見

最終年度に、雪岱と同様挿絵と舞台装置のいずれにおいても活躍した木村荘八が関わった作品についての調査に取りかかったが、その過程で、荘八の仕事は画家個人の問題として捉えるよりも、彼の所属団体・春陽会の動向の中に位置付け詳細な調査・検討を行う必要があることに思い至った。大正11年に発足した春陽会の会員には新聞小説挿絵と深い関わりを持つ画家が多数所属しており、その展覧会においては「挿絵室」なるものを設け、美術側から文学へ積極的な働きかけを行っている。美術分野の文献には挿絵室に触れたものもあるが詳らかではなく、文学分野からこの点に言及したものは殆ど皆無である。文学に極めて近い位置にある春陽会の活動内容を具体的に明らかにすることは、新聞小説という同時代文化の様相を体系化する上で不可欠な作業である。また研究の過程では、同時代の挿絵画家によって組織される挿絵画家協会なるものの存在があることも明らかになった。その動向の調査も、挿絵画家と新聞小説の関係性の解明において必要なものであると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 泉由美	4. 巻 18
2. 論文標題 『東陽』所収「挿絵座談会」における諸問題 同時代の中の挿絵（一）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 阪大近代文学研究	6. 最初と最後の頁 18～35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 泉由美	4. 巻 89巻7号
2. 論文標題 一葉 という表象 邦枝完二「樋口一葉」における雪岱挿絵の意義	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語国文	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒井真理亜、高野奈保、多田蔵人、出口智之、泉（新井）由美、松本和也	4. 巻 臨時増刊第二号
2. 論文標題 〔新出〕石井鶴三宛北沢楽天書簡等資料九十五点：翻印と紹介	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 信州大学附属図書館研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 泉由美	4. 巻 16
2. 論文標題 村松梢風「綾衣絵巻」における挿絵の意義	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本研究論集	6. 最初と最後の頁 1～23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 泉由美
2. 発表標題 『福岡日日新聞』と小村雪岱 「藤三行状記」の周辺
3. 学会等名 共同研究会・新聞小説を多角的に考える
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 泉由美
2. 発表標題 邦枝完二「樋口一葉」論 一葉 の描き方
3. 学会等名 樋口一葉研究会第三十二回例会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 新井（泉）由美
2. 発表標題 邦枝完二「江戸役者」に関する一考察 挿絵周辺の諸問題
3. 学会等名 共同研究会・昭和戦前の新聞小説を考える
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 新井（泉）由美
2. 発表標題 小村雪岱の新聞小説挿絵通観
3. 学会等名 共同研究会：新聞小説の時代・領域横断
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 泉由美
2. 発表標題 新聞連載小説挿絵の諸相 小村雪岱の仕事を中心に
3. 学会等名 第八回大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 泉由美
2. 発表標題 舞台装置を考える 小村雪岱の仕事を中心に
3. 学会等名 第五回文学と美術研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 斎藤理生・泉由美編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 パブリック・ブレイン	5. 総ページ数 118
3. 書名 新聞小説を考える 昭和戦前期・戦中期を中心に	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考